



灰釉瓶 1961年

展覧会会期

2014年10月11日[土]～2015年1月12日[月祝]

菊池寛実記念 智美術館

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1F

TEL03-5733-5131 FAX03-5733-5132 <http://www.musee-tomo.or.jp>

プレスプレビューのご案内は8頁をご覧ください。

「陶器は火と土の音楽」

「耳で聞く陶器」

「目で見る音楽」

(…) 音楽は音であり、音を音たらしめるのが楽器である。

陶器は土であり、土を土たらしめるのが火である。

「陶器と音楽」より
※リリース9頁に全文掲載

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、私ども菊池寛実記念 智美術館の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。このたび当館では10月11日より「岡部嶺男 火に生き 土に生き」展を開催いたします。

現代陶芸の原点の一人である岡部嶺男（1919-1990）への注目が、2007年に開催された回顧展以来高まりつつありますが、本展では選りすぐりの60点余の作品により、その真髄を改めてご覧いただけます。

展覧会を多くの皆様にお知らせいただき、周知にご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

敬具

■ 展覧会概要 ■

- 展覧会名 「岡部嶺男 火に生き 土に生き」展
- 会期 2014年10月11日(土)～2015年1月12日(月・祝)
- 観覧料 一般1,000円／大学生800円／小中高生500円

- 主催 公益財団法人菊池美術財団
- 協賛 京葉ガス株式会社
- 会場 菊池寛実記念 智美術館（〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-1-35 西久保ビル）
<http://www.musee-tomo.or.jp>
- 開館時間 午前11時から午後6時まで（入館は午後5時30分まで）
- 休館日 毎週月曜日（ただし10月13日、11月3日、11月24日は開館）、10月14日、11月4日、11月25日（各火曜日）休館。
年末年始12月28日（日）～2015年1月1日（木）
- 展示内容 岡部嶺男作の陶器、関係資料等65点余を展示（会期中展示替えを行います）

展覧会に関するお問い合わせ 担当：花里・高田（☎03-5733-5131/FAX03-5733-5132）

■ 展覧会内容のご紹介 ■

■ 土や釉薬のマチエールの魅力

岡部嶺男（おかべ・みねお 1919-1990）は、戦後に活躍した陶芸家のなかでも、現代陶芸の原点といえる存在です。技術力、造形力ともに優れ、伝統の形式や様式を手がかりにしながら、陶芸の芸術性を追求しました。

作陶にあたって造形以上に重要視したのが、土や釉薬のマチエールの表現です。土については自ら原土を採取し、釉薬も灰から自製し、自ら設計したユニークな構造をもつ半地上式穴窯の築窯時は、築くためのレンガも自分でつくり、創意が造形全体に行き渡るようにしました。

土や釉薬の動きを造形化し、マチエールに存在感をもたせた作品は、躍動感に満ち、技術とのせめぎ合いからくる緊張感にも満ちています。



（図2）青織部縄文鉢 1956年



（図3）古瀬戸灰釉瓶子 1962年

■ 卓抜した技術力

岡部の造形力を支えた技術の基盤は、生まれ故郷の瀬戸の地で培われたものです。

1919年、瀬戸の窯業の中心地、^{かまがみやま}窯神山で生まれた嶺男は、陶器づくりの基本を幼い頃から門前の小僧のように身につけ、小学校を卒業後に入学した窯業学校時代には、釉薬や焼成の研究を自らすすんで行い、その腕前は教師をしのぐほどに達しました。

こうして戦前に身につけた織部や志野、黄瀬戸、「古瀬戸」と称する灰釉、鉄釉、飴釉などの技法を、戦後は作品制作を通して磨き上げ、陶芸の芸術性として追求したのです。



（図4）黄瀬戸平鉢 1964年

■ 作品の変遷

作家活動は、復員後の1947年から大病に倒れる1978年までの実質30年余りといえます。手がけた技法は幅広く、先に挙げた各種技法のほか、中国陶磁由来の青瓷や天目、三島や粉引などの朝鮮系の陶技、さらには唐津、伊賀、備前におよび、それぞれの技法で代表作を残しています。

多技多彩な岡部の陶芸ですが、作品の変遷を敢えて3つの作風に代表させて大概します（次頁）

I. 縄文織部による作家デビュー (図2参照 →各作品解説は4~5頁)

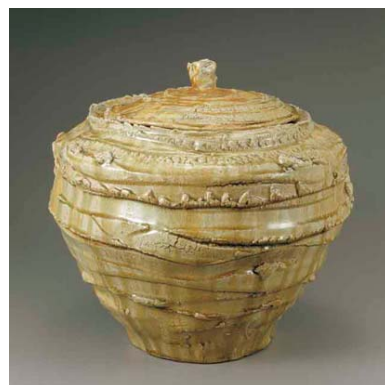
縄文織部は、日展に在籍した1950年から56年の時期を代表する造形です。縄文時代の生命力と桃山時代の活力に現代の感性を融合させた意欲的な作風で、発表当時から高い評価を受けました。1954年第10回日展で北斗賞を受賞し、翌55年には第1回日本陶磁協会賞を受賞（その後辞退）しています。

II. 「永仁の壺」が制作のきっかけとなった灰釉瓶子の連作 (表紙、図3参照)

1960年5月、前年に重要文化財に指定された「永仁銘の瓶子」について、自身の理解者であり文化財の審議官であった陶磁研究の第一人者小山富士夫に、壺の母体を作り焼いたのは自分であると告白します（戦前につくったものが知らないうちに鎌倉時代の作として世に出ていたのです）。

発言の責任をとるために、岡部は永仁銘の瓶子と同じ技法で灰釉の瓶子を制作します。春に患った肺結核のために万全な体調ではありませんでしたが、制作は3年がかりの連作となり、30数本の瓶子がつくられました。

瓶子の連作は、すぐに独自の造形へと変遷します。形状がダイナミックになり、激しい窯変や器胎の割れなど、土と釉薬と火による抽象表現の様相を呈し、岡部の感性が解放された造形となっています。



(図5) 古瀬戸釉蓋壺 1967年

III. 豊饒の作陶、そして青瓷へ (図2、4~9参照)

瓶子の集中的な制作により、土と釉薬と火の精髓を究めたかのように、灰釉系の技法に独自性が増し、「古瀬戸」と称される灰釉、鉄釉、飴釉、織部、志野、黄瀬戸などの代表作が1968年頃にかけて制作されました。また、灰釉の研究は青瓷の創出へといたり、1962年12月の窯で青瓷の焼成が完成します。1965年には失透性の貫入のない淡いブルーの粉青瓷がつくられ、その後、粉青二重貫入、米色瓷、米色二重貫入と、短期間のうちにさまざまな釉調の青瓷が1974年にかけて開発されました。

躍動的な造形から一転、青瓷は左右対称の静かな造形です。土と釉の材質美を追求し、技術とのせめぎ合いからくる青瓷の緊張感は、躍動感と相通じる作家のエネルギーを感じさせます。



(図6) 古瀬戸灰釉縄文瓶 1968年

■ 作品解説

図1 「灰釉瓶」1961年 高さ31.7cm 径21.8×22.0cm

鎌倉時代の古瀬戸を連想させる作品ですが、口縁の造形や篋削りを強調した仕上げは岡部の独特な表現です。水平に何本も走る篋目がシルエットに動感をもたらします。篋目や刻線の凹部に灰釉が溜まり、側面には激しい釉垂れがあり、光を受けて輝く様は器胎の荒々しい破れと好対照をなしています。



(図7) 粉青瓷砵 1969年

図2 「青織部縄文壺」 1956年 高さ41.5 径35.6×36.2cm 柳澤コレクション

縄文時代の生命力、桃山時代の活力、現代の感性を融合させた意欲的な造形で、口のないオブジェとしてつくられた本作は、八木一夫の「ザムザ氏の散歩」を意識したかのような野心をうかがわせませす。縄を巻いた手製の道具で叩き出した「壺」のリズミカルな形状と縄目が見事に一体化しています。

図3 「古瀬戸灰釉瓶子」 1962年 高さ38.1 径25.4×24.7cm 柳澤コレクション

連作となった瓶子のなかでも、口の形状が大きくなり、肩も張り出し、窯変も激しく、岡部の感性を解放させた造形です。灰釉の上に加えた鉄釉が紺黒色に窯変し、炎に耐えきれず生じた亀裂が肩の周りとお腹を割き、その部分に金継ぎをほどこしています。

図4 「黄瀬戸平鉢」 1964年 高さ8.7 径35.0×36.0cm

土と釉薬の動きを造形化して躍動感を表した輪花型の鉢です。篋で削り出した土を拭わずに軽く押さえつけ、そこに溜まった釉薬がガラス化して黄緑色に輝きます。

図5 「古瀬戸釉蓋壺」 1967年 高さ31.0 径34.0×33.5cm

「古瀬戸」と称する灰釉、鉄釉、飴釉について、岡部は「心のふるさと」、「仕事の原点」ととらえていました。本作は黄色みの強い灰釉の作品で、箱書きには古瀬戸釉と書かれています。篋で削り込んで土の表情を際立たせ、凹みに溜まった釉薬が煌きます。マチエールの存在感を表現した岡部独得の表現です。

図6 「古瀬戸灰釉縄文瓶」 1968年 高さ36.1 径45.8×41.7cm

縄文は1950年代の中頃を代表する造形ですが、灰釉を使って再度試みられました。1968年は、青瓷の制作が充実している頃であり、改めて岡部の造形力と技術力の豊かさに驚かされます。

図7 「粉青瓷砵」 1969年

高さ32.0 径23.0×23.0cm

茨城県陶芸美術館蔵

岡部は青瓷砵の制作にあたり、本歌に倣った形状から、しだいに釉薬の動きと関連づけて展開させ、独自のバリエーションをつくりだしました。本作は、同年三月に新宮殿におさめた一対の「粉青瓷砵」の姉妹作の一点です。

図8 「窯変米色瓷砵」 1971年

高さ28.5 径17.6×17.6cm

青瓷と同じ土と釉が、焼成の案配により黄色みを帯びて呈色するのが米色瓷です。本作は砵型のバリエーションのうち、口づくりやお腹下部の形状、左右非対称につけた耳に、独自の表現が見られます。



図9 「翠青瓷茶碗」 1968年頃 高さ10.0 口径14.5cm

岡部が手がけた青瓷の作品のうち、茶碗は究極の造形の一つです。すべてが見どころといえ、厚みのある青瓷釉の質感、貫入の向こうに土の色が透ける透明感、釉抜けした指あとから見える轆轤目、おおらかな見込み、高台の土見せは施釉時の手のかたちを伝え、その中央に独得な「バラ高台」を削り出しています。中国陶磁由来の青瓷を和陶で表現した造形です。



■ 展覧会関連行事 有料のイベントは智美術館 03-5733-5131 にて受付

◆ 講演会 当館 B1 階展示室ホールにて (観覧料のみ、聴講無料)

- ① 「岡部嶺男 日本陶磁史からのアプローチ」 11月15日(土) 15:00より
講師 伊藤嘉章氏(東京国立博物館学芸研究部長)
- ② 「官窯青磁へのまなざし」 12月13日(土) 15:00より
講師 今井敦氏(文化庁文化財部主任文化財調査官)

◆ 学芸員による ギャラリートーク (観覧料のみ、聴講無料)

10月18日/11月1日、22日/12月6日、20日 各土曜日、14:00より

◆ ナイトミュージアム「能管一管による演奏会」 当館 B1 階展示室ホールにて

11月29日(土) 18:30(開場18:15)

演奏: 藤田六郎兵衛氏(能楽笛方藤田流11代宗家)

閉館後の展示室を会場に能管の調べをお楽しみいただくユニークなイベントです。

参加費=3,000円(観覧料を含む。当日観覧券をお持ちの場合は2,000円)

定員=50名様(予約制・先着順)

◆ 西洋館見学会 (予約制・定員20名様)

10月18日(土)、11月15日(土)、12月6日(土) いずれも11:00時より

当館敷地内にある西洋館(登録有形文化財)は、大正時代に建てられた後、修復を重ねながらも建具等の室内装飾が丁寧に保全され、今日まで使用されている希少な建物です。通常、非公開の内部を上記の日程で限定公開いたします。

※西洋館のご案内(建築家 篠田義男氏による)、美術館観覧料(学芸員の解説付き)、レストラン ヴォワ・ラクテでのランチを含め、お一人様8,000円です。

◆ 智美術サロン “まずは中国陶磁を知ることから” (2014年度テーマ)

智美術館が主催する「智美術サロン」は、展覧会の関連行事とは別の通年講座です。その年ごとにテーマを掲げ、専門の方々を講師にお招きして開催いたします。サロン会場は美術館1階のレストラン、ヴォワ・ラクテ。オリジナルデザートをお召し上がりいただきながらゆったりとご聴講いただく講座です。

第3回 講師 中澤富士雄氏(たましん歴史・美術館学芸員)・川瀬忍氏(陶芸家)

10月12日(日) 15:00より **(※募集は第3回、4回とも満席となっております)**

第4回 講師 川島公之氏(繭山竜泉堂専務取締役)

11月16日(日) 15:00

会場 菊池寛実記念 智美術館1階レストラン「ヴォワ・ラクテ」

参加費 3,000円(各回定員40名様・デザート・お飲物のサービスを含む)

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースで紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を1点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先 菊池寛実記念 智美術館（担当：花里、高田）

TEL.03 (5733) 5131 FAX.03 (5733) 5132 <http://www.musee-tomo.or.jp/>

掲載・画像貸出申込書

返信先 FAX : 03-5733-5132

●貴社基本情報

会社名:	
担当部署:	担当者名:
住所:	
電話	ファックス:
E-MAIL:	

●媒体情報

新聞 雑誌	媒体名:
	発行日:
TV ラジオ	媒体名:
	放送日:
ネット	URL:

●画像貸出リスト ※キャプションには作者・作品名・制作年・撮影者を必ず入れてください。

希望作品に☑	作品キャプション
<input type="checkbox"/>	図1) 灰釉瓶 1961年 高さ31.7cm 径21.8×22.0cm (撮影:尾見重治、大塚敏幸) ※表紙の作品
<input type="checkbox"/>	図2) 青織部縄文塊 1956年 高さ41.5cm 径35.6×36.2cm 柳澤コレクション
<input type="checkbox"/>	図4) 黄瀬戸平鉢 1964年 高さ8.7 径35.0×36.0cm (撮影:尾見重治、大塚敏幸)
<input type="checkbox"/>	図7) 粉青瓷砵 1969年 高さ32.0 径23.0×23.0cm 茨城県陶芸美術館蔵 (撮影:尾見重治、大塚敏幸)
<input type="checkbox"/>	図8) 窯変米色瓷砵 1971年 高さ28.5 径17.6×17.6cm

●読者プレゼント用チケット希望: 5組10名様 10組20名様

プレスレビューのご案内

展覧会の趣旨、作品解説など、内覧会に先立ちましてプレスの皆様にご説明申し上げます。
ご多用のなか恐縮に存じますが、どうぞご出席くださいますようお願い申し上げます。

菊池寛実記念 智美術館

プレスレビュー 2014年10月10日(金) 14:00～

14:00～14:45 展示室にて、展覧会のご説明、作品解説を行います。
展覧会の会場内をご撮影いただけます。

14:45～15:00 皆様からのご質問にお答えいたします。

会場： 菊池寛実記念 智美術館 〒105-0001 港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1
・日比谷線・神谷町駅出口 4b より徒歩 6分
・南北線・六本木一丁目駅改札口より徒歩 8分
・南北線／銀座線・溜池山王駅出口 13 より徒歩 8分
・銀座線・虎ノ門駅： 出口 3 より徒歩 10分

ご出席いただける場合は、下記フォームにご記入の上、FAXにて

ご返信下さい。 **返信先 FAX 03-5733-5132**

会社名：

担当部署、氏名

住所：

電話：

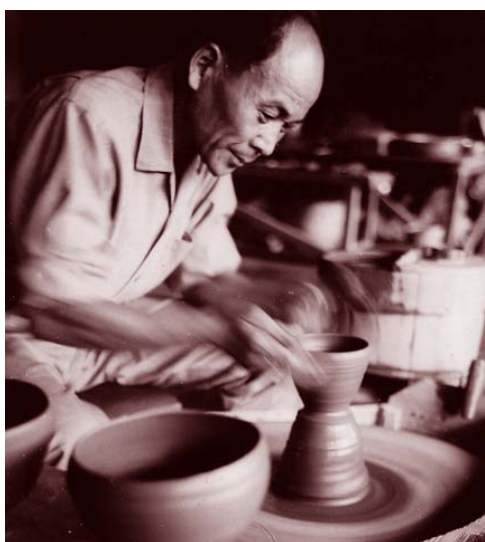
FAX：

Email

岡部嶺男（1919～1990） 略歴

1919 加藤唐九郎（加納庄九郎）長男として愛知県の瀬戸に生まれる。
1927 父が祖父母の加納姓から加藤に改姓、その後、唐九郎と改名。
1937 愛知県立瀬戸窯業学校を卒業。轆轤、窯焚きなど高度な製陶技術を身につけていた嶺男が一家を支える。
1940 太平洋戦争が始まる。東京物理学校を中退、その後入営。
1945 ルソン島の戦闘で米軍に敗北。仲間9人とジャングルに逃げ込むが、嶺男を含む5名のみ生き延びる。終戦。
1947 復員。父と弟妹が住む愛知県西加茂郡猿投村平戸橋を訪ね、居を定める。平地窯を築き、本格的に作陶を再開。
1949 岡部辰子と結婚。大きい平地窯と素焼窯を築窯。
1950 第6回日展に初出品。この年の中頃より作品にサインを入れる。
1951 名古屋にて初個展。志野、紅志野、織部、黄瀬戸、三島手、粉引、刷毛目、唐津、井戸手、斗々屋手などを積極的に手掛ける。
1954 第10回日展に縄文の「青織部壺」を出品、北斗賞受賞。
1955 丸善画廊にて第1回個展。第1回日本陶磁協会賞受賞。
1956 丸善画廊にて第2回個展。縄文の大作12点を展示。
1957 前年に日展を退会。日本工芸会正会員となる。

1958 半地上式穴窯を築き、初窯を焚く。
1959 ブリュッセル万国博覧会（開催は前年）にてグランプリ受賞。
1961 59年に重要文化財指定された永仁銘瓶子の指定が取消される。
1962 青瓷風の試作品が出来、以降青瓷の研究に打込む。
1964 日本工芸会を脱会。夫婦で話し合い戸籍上のみ離婚の形をとる。
1965 無貫入の粉青瓷を完成させる。
1967 粉青瓷二重貫入が完成。
1969 宮内庁より注文された青瓷大砵一對を、皇居新宮殿に納める。陶磁研究者の小山富士夫に同行して台湾の故宫博物院を訪問。
1970 日進町の穴窯で窯変米色瓷の作品が焼成できるようになる。
1971 「火と土に賭ける鬼才の全貌 嶺男展」（日本橋高島屋、東京）。
1978 6月、欧州旅行。翌月自宅で倒れ入院。年末に岡部辰子と再婚、加藤から岡部姓に改姓。
1981 「現代陶芸の鬼才 岡部嶺男展」（日本橋高島屋、他）。
1987 鉄釉の「窯変嶺燦碗」を焼成。
1989 「孤高の陶芸家 岡部嶺男 再起新作展」（松坂屋、名古屋）
1990 9月4日肺がんによる呼吸不全にて逝去。6日、自宅で音楽葬。



陶器と音楽 加藤嶺男

「陶器は火と土の音楽」

「耳で聞く陶器」

「目で見る音楽」

私はバッハに代表される音楽が好きというだけで、音楽の知識はまったくとぼしい。

陶器に関しては専門家であるが、好きという点では、音楽を愛するようにアマチュア的にこよなく愛している。

私は、太平洋戦争の末期南方で敗残兵として食糧がなくなってから四十日ほどジャングルのなかをさまよいつづけた事がある。

頭はもはや何も考へる力もなく、もっぱら食べ物の幻影が去来するのみという極限状態に於てなほベートーヴェンの音楽（第九シンフォニー第一楽章、作品百三十二[※弦楽四重奏曲第15番イ短調]の後半）が食べ物の幻想のもう一つ奥のところでひびいていた。

其の後私は、あの極限状態をふりかへって、音楽という音で組み立てた抽象的な芸術の強さというものを痛感した。

戦後私が積極的に陶器を作るようになったのもあの経験が大きな動機になっている。

陶器は本来、具象的な表現には適していない。本質的にみて音楽がそうであるように、陶器も具象的な表現の世界と異質な分野により深い可能性があるように思ふ。

古典派がソナタ形式を完成させていったように、其の以前に存在した素朴なもの、原始的なもの、叙情的なもの、ムード的なもの、それ等を足がかりにして其れをのり越へたより深い、より強固な表現形式の完成。そして其れを肯定・否定に関らず其の後の展開の強固な土台になっている形式。

私にとっての足がかりは、李朝的な茶器のもつ素朴な生命感。原始土器のもつもの、鎌倉古瀬戸、桃山陶のもつムード的なものであった。

音楽は音であり、音を音たらしめるのが楽器である。

陶器は土であり、土を土たらしめるのが火である。

我々日本人にとって、日本的なものは無意識のうちに肉体化されて一切の思想・精神をがんじがらめにしている。其の日本人が日本的なものを意識するのは、ムードの袋小路に落ち込むおそれがあるように思へる。

特に伝統と言われる分野に其の傾向が強い。一見其の逆のように見へる前衛と言われる分野にも、翻案的なムードだけを追ったものを感じずる。

私が、「陶器と音楽」と言ふ事を考へるのは、私個人にとっては飛躍も何もない常識的な問題なのだが。

陶芸という発想、作る側も受けとめる側も芸術とみなしているという状態、この考へかたはヨーロッパ文化圏には無い。

逆に、東洋にはヨーロッパ音楽のようなものは展開しなかった。

バッハの「フーガの技法」を聞いていると万里の長城が浮かぶ。

其の後のものもそうだが、あれだけの表現が出来るのは社会の支持と期待が無くては実現しないだろう。

東洋の陶器が、ある意味で共通した面があるように思へる。

陶器のエッセンスである宋官窯のなかの其の極致と思へる汝窯が徽宗皇帝の存在を無視しては考へられない。

日本の茶道も原因しているだろう。ヨーロッパ文化のなかにはない歴史的な積み重ねによって現在我々が考へている（感じている）可能性が生まれたものと思ふ。

現在の日本の社会（国際的にも知れない）では、文化は強大な文明を前に其の主体性を喪失しマスコミと権威のアダ花に転落し、ムードの空転をくりかえしている。利休にとって茶道は文化革命であり彼の芸術の実現手段であり、文化の優位性をうたい上げたはず。

日本の文化といわれるものにこの共通した、生命力を失った文化の残骸を感じるのは私一人ではないだろう。

我々のみがもち得た陶芸という世界。

そして其の芸術としての可能性、人類文化としての展開。

最近陶芸の異常な社会化にも関わらず其の芸術としての本質に関する意見をきかない。ムードが本質の如く論じられているように思へる。

伝統の歴史的要因、未来への展開の可能性、文化の主体性の確立。

という問題を考へるとき、ヨーロッパ音楽がたどった道に教えられるところが大きいと思ふ。

陶芸の世界に「バッハ」「ベートーヴェン」「シェーンベルク」「バルトーク」の現れることをいのる。

（執筆年不詳）

（出典『陶愁 岡部嶺男作品集』小学館、2007年）